

二『ヒア・カムズ・ザ・サン』成井豊

○ジャンル／ファンタジー

○ストーリー／真也は29歳、出版社で編集の仕事をしている。彼は幼い頃から、品物や場所に残された、人間の記憶が見えた。ある日、真也は同僚のカオルとともに成田空港へ行く。カオルの父が、アメリカから20年ぶりに帰国したのだ。父は、ハリウッドで映画の仕事をしていると言う。しかし、真也の目には、全く違う景色が見えた……。

○出演者／男4＋女4＝計8

○上演時間／60分

登場人物

古川真也

(出版社勤務)

白石晴男

(カオルの父)

大庭カオル

(真也の同僚)

輝子

(カオルの母・幼稚園経営)

岩沼

(真也の上司)

名取

(真也の同僚)

明日菜

(真也の妹・大学院生)

孝枝

(真也の母)

四谷三丁目の喫茶店。古川真也・大庭カオルが座っている。

真也
カオル

カオルちゃん、結婚適齢期って言葉、知ってる？最近聞かなくなりましたよね。もう死語なんじゃないですか？「くんずほぐれつ」とか「さもありません」みたいな。

真也

僕、今でも言うよ、さもありません。

カオル

それは古川さんだけです。普通の人は使いません。

真也

そうかな。いや、「さもありません」はどうでもいいんだ。僕は結婚適齢期の話をしようとしてたんだ。

カオル

今は何歳ぐらいなんでしょうね。男の人だったら、二十九？ 三十？

真也

僕は昔から、三十になるまでに結婚しようと思ってた。で、今年の八月がその期限なんだよ。

カオル

うわあ、じゃ、もうあと二カ月しかないじゃないですか。

真也

そう、そうなんだよ。だから、これ。

真也がポケットから箱を取り出して、カオルに差し出す。

カオル

何ですか？

カオル

古川さんて、時々、フリーズすることがありますよね？ 自分の世界へ入っちゃうって言うか、まるで時間が止まったみたいにな、動かなくなる。あれって、どうしてなんですか？

真也

気づいてたのか。

カオル

入社して、すぐに。まあ、大したことじゃないから、気にしてませんでしたが。

真也

これから一緒に生活していこうって人に、隠し事はよくないな。わかった。話すよ。

カオル

話すって、何を？

真也

カオルちゃん、僕は子供の頃から、物や場所についてる記憶が見えるんだ。本で読んだことないかな？ いわゆるサイコメトリーってやつさ。

カオル

古川さん、からかうつもりなら、怒りますよ。その時計、貸して。

真也

カオルが腕時計を外して、真也に渡す。真也が目を閉じる。

カオル

これについてる記憶を見るっていうんですか？ でも、これは自分で買ったものだし、大した思い出しは——

真也

キッチンだ。君はパセリを刻んでる。時計が邪魔で外した。時計を持ったまま、鍋の蓋を開けた。お湯の中へ、時計が落ちた。君はギャーと叫んだ。慌てて拾おうとしたら、誰かが止めた。その人が菜箸で時計を掬い上げた。笑ってる。この顔には覚えがある。君が担当してた、君原先生だ。

カオルが真也の手から腕時計を奪い取る。真也が目を開ける。

真也

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

ごめん。君原先生が出てくるとは思わなかったから。

今の話、先生から聞いたんですか？

僕はある人には二、三回しか会ったことがないよ。

じゃ、先生が部長に話して、部長が古川さんに話して。

鍋の色は赤。菜箸はステンレスで、持ち手のところが黒のプラスチック。

あと、お湯の中には麺がいっぱい入ってた。

パスタを作ろうとしてたんです。アサリがいっぱい入った、ボンゴレ・ビ

アンコ。先生の大好物だったから。

信じてくれた？

古川さん、一つ質問があります。もし誰かが嘘をついていたとして、その

力を使えば、本当のことがわかりますか？

さあ。

わからないんですか？

僕は、君がボンゴレを作った記憶を見た。だから、君が作ってないと言っ

ても、それは嘘だとわかる。でも、作ったけど、食べてないと言ったら、

判断のしようがない。だって、食べた記憶は見えないんだから。

つまり、どんな記憶がついているかは、運次第ってことですか？

ご明察。

古川さん、一つお願いがあります。

結婚のことなら、すぐに答えろとは言わないよ。一週間でも二週間でも、

じっくり考えてほしい。だって、一生のことだから。

カオル
真也

そうじゃなくて、私が頼みたいのは、私の父のことなんです。
父？ カオルちゃんのお父さんて、子供の頃に亡くなったんじゃないか
っけ？

カオルが真也の手をつかむ。真也が目を開ける。白石・輝子・岩沼・名取・明日菜・孝
枝がやってくる。カオルが真也の手を放し、他の人々と話し始める。真也が目を開ける。
他の人々の動きが止まる。真也が白石の手をつかむ。他の人々が動き始める。白石が真
也の手を放し、他の人々と話し始める。真也が目を開ける。他の人々の動きが止まる。
真也がカオルの手をつかもうとする。が、カオルは身をかまし、走り去る。他の人々も
走り去る。

成田空港の到着ロビー。白石晴男がやってくる。トランクを持っている。

真也 白石さん？ 白石晴男さんですよ？

白石 君は？

真也 白石さんと同じ会社に勤めている、古川真也です。カオルさんには公私共にお世話になっていきます。

白石 ふーん。で、カオルは？（周囲を見回す）

真也 実は、よんどころない事情で、来られなくなりました。

白石 よんどころない事情？

真也 新宿駅まで来たところで、上司から電話があったんです。すぐに会社に来いと。

白石 今日は土曜だろう。

真也 それはそうですけど、どうしても彼女じゃないとダメらしくて。

白石 それで、俺よりも会社を取ったのか。実の父親が二〇年ぶりに日本へ帰ってきたのに、目の前の仕事を選んだのか。偉い。

真也 は？

白石 カオルは本を作ってるんだよな？

真也 ええ。児童書編集部で、小学生向けの読み物のシリーズを。

白石

真也
白石

真也
白石

真也
白石
真也
白石
真也
白石

真也
白石
真也
白石

物作りって言うのは、中途半端な気持ちでできることじゃない。自分の時間をすべて捧げる。それぐらいの覚悟がないと、いい物は作れないんだ。そうだろうか？

ええ、全く同感です。

しかし、俺はどうなる？ ロサンジェルスから成田まで、十二時間も狭い所に押し込められて、ようやく娘に会えると思ったら、現れたのはむさ苦しい男だ。

すみません、むさ苦しくて。

マクドナルドでクウォーターパンダーを注文したら、ただのハンバーガーが出てきた。その上、バンズとバンズの間に、パテが入ってなかった。そんな気分だ。

そこまでガツカリなさったんですか。誠にお詫びのしようもありません。気にするな。カオルの顔を見れば、すぐに気が晴れる。

それを聞いて、安心してました。じゃ、ホテルまでご案内しましょう。

その前に、カオルの会社へ行きたい。

会社へ？ でも、カオルさんは今、仕事中ですよ。

仕事の邪魔をするつもりはない。顔が見られれば、それで十分だ。悪いが、

トランクを持ってくれ。(歩き出す)

ちよつと待ってください、お父さん。

今、俺をお父さんと呼んだな？

すみません、つい。

俺の名前は白石晴男だ。これからは、ハリーと呼べ。
ハリーですか？

白石

真也

白石

真也

白石

真也

白石

四谷三丁目の
メーブル社。岩沼がやってくる。

岩沼

白石

真也

岩沼

晴男だからハリー。二〇年前から、そう呼ばれてる。ハリー・ポッターのシリーズが始まる前からだ。行くぞ。(歩き出す)

でも、そっちはレストラン街ですよ。成田エクスプレスはあっちです。ほら、この表示に書いてあるでしょう。

俺は子供の頃から近眼なんだ。おまけに老眼まで始まって、近頃は眼鏡をかけないと、何も見えない。それなのに。(眼鏡を取り出す)

レンズが割れてますね。

ロサンジェルス空港で落としたんだ。そこへ、体重一五〇キロぐらいの女がやってきて、グシヤ。

これが読めないってことは、かなり視力が落ちてますね。良かったら、腕を組みましょうか、ハリー？

ノー・サンキューだ、真也。

大庭君なら、一時間ほど前に、出ていきましたよ。

出ていった？ どこへ？
彼女が担当している作家さんからクレームが来ましてね。ご自宅へお詫びに行ったんです。

多賀先生ですか？

ああ。昨日、初校ゲラに手を入れ始めたらしいんだが、大庭君のチェックがお気に召さなかったみたいで。いきなり電話をかけてきて、「あの書き方はなんだ、無礼にも程がある」って。

真也
岩沼 カオルちゃんじゃなくて、部長に文句を言ってきたんですか。
付き合いは、俺の方が長いからな。「今すぐ、担当を代えろ」って、そり

白石 や凄いい剣幕だった。
つまり、カオルはミスをしたわけですか。

岩沼 いや、多賀先生の原稿に問題があったのは事実なんです。しかし、二十も
年下の編集者に「間違ってます」って書かれたら、そりゃ、頭に来ますよ。

そこへ、名取がやってくる。四つのカップをテーブルの上に置く。

名取 お待たせしました。
白石 この匂いは紅茶か？ 俺は日本茶の方がよかったな。

白石がカップを倒す。紅茶がこぼれる。

名取 ひどい。何もこぼすことはないでしょう。（テーブルを拭く）

白石 違う。わざとじゃないんだ。俺は近眼の上に老眼で、それなのに、眼鏡が
壊れてて。（眼鏡を取り出す）

岩沼 名取、新しいのを淹れてこい。今度は日本茶だ。

白石 いや、結構。俺はこれで十分だ。（カップを取って）まだ少し残ってる。
真也 そう言わずに、僕のをどうぞ。（カップを取り替えて）それが飲み終わっ

たら、ホテルへ行きましょう。

白石 その前に、多賀って人の家へ行きたい。
真也 多賀先生のお宅へ？ いくらなんでも、それは困ります。

名取 白石 白石 名取 岩沼 名取 岩沼 白石 真也 白石 真也 名取 岩沼 白石 真也

ら勉強し直すって。驚いたよ。二十ならともかく、三十にもなって、アメリカへ行こうなんて、とんでもない勇気だ。でも、行くなら、今しかない。今行かなければ、俺は一生、監督になれない。

それで、日本を飛び出したってわけか。カッコいい。

（白石に）でも、奥さんには反対されたでしょう？
もちろんだ。俺は「落ち着いたら迎えに来る」って言ったんだが、「行くなら離婚してから行け」って、離婚届に判を押させられた。

カオルさんは？

何も言わなかった。俺が家を出る時も、俺の顔をジッと睨むだけで。悔しかったんですよ。父親が自分より仕事を取ったんだから。

（白石に）で、結局、監督にはなれたんですか？

二十年間頑張ったんだが、まだそこまでは行ってない。今は撮影監督の助手みたいなことをしてる。照明のプランニングとか。

え？　じゃ、あなたは本当にハリウッドで仕事をしてるんですか？

おまえ、今まで、疑ってたのか？

いや、「結局、日本料理店の店長をやってます」とか、そういうオチが来るだろうと思ってたんで。（白石に）じゃじゃ、ナタリー・ポートマンとかキーラ・ナイトレイに会ったことがあるんですか？

その二人と一緒に仕事をしたことはないが、見ろ、このハンカチを。（ハンカチを差し出して）これはダリル・ハンナにもらったものだ。

（受け取って）誰ですか、その人？

君はダリル・ハンナを知らないのか？　見てないのか、『ブレードランナー』を。

名取 (真也にハンカチを差し出して) 知ってます？
真也 (受け取って) さあ、僕は映画はあんまり見ないから。(目を閉じる)
名取 部長は？

岩沼 俺は邦画専門だ。寅さんシリーズのマドンナ役なら、全員言えるぞ。

白石 おい、どうした、真也？

真也 (目を開けて) いや、何でもありません。(ハンカチを差し出して) 紅茶

白石 も飲み終わって、そろそろホテルへ行きませんか。

白石 いや、俺はここでカオルの帰りを待つ。ホテルへ行っても、することがな

いし、どうせ今夜は二人で食事をする予定だった。

白石 でも、僕たちがいると、仕事の邪魔になりますから。

真也 静かにしてくれれば、気になりませんよ。名取、仕事再開だ。

岩沼 了解。(白石に) あの、アン・ハサウェイに会ったことは？

名取 一度、スタジオですれ違ったことがあるが、それがどうかしたか？

白石 次に来う時、こう伝えてほしいんです。「名取讓があなたを応援してます」

白石 っ。

白石 オーケイ、讓。

名取 サンキュー、ハリー。

岩沼・名取が去る。

大泉学園のカオルの家。大庭輝子がやってくる。

輝子　で、五時まで待っても、戻ってこなかったわけ？
真也　ええ。携帯にかけても、繋がらなくて。ひよっとして、自宅へ直帰したん

輝子　じゃないかと。
六時過ぎに電話があつた。担当している作家さんに夕食をご馳走してもら

白子　うことになったから、遅くなるって。

輝子　待って待って。今夜は俺と食事する約束だっただろう。

白子　あなたにはキャンセルの電話をしたって言ってたけど。

真也　（白石に）ホテルにかけたんじゃないですか？　で、フロントに言づけを

白子　頼んだんですよ。

輝子　（輝子に）帰りは何時になるって？

白子　さあ。早くて、十時ぐらいじゃないかな。

輝子　ここで待たせてもらっていいか？

白子　それは困る。これから、人に会う約束があるのよ。

輝子　こんな時間に？

白子　経営者は忙しいの。

輝子　（真也に）輝子は幼稚園の園長なんだ。その幼稚園は輝子のおじいさんが

真也 白石 輝子 白石 輝子 真也 白石 輝子 真也 白石 輝子 真也

作ったもので、つまり輝子は三代目の園長ってことになる。
大庭幼稚園ですよ？ カオルさんから聞いてます。

古川さんでしたよね？ 今日はどうしてこの人と？

カオルのかわりに、成田まで迎えに来てくれたんだ。彼に会うのは初めて
なのか？

(真也に)家にいらしたことはないですよ？

カオルさんを家の前まで送ってきたことは何度か。

え？ じゃ、カオルの彼氏？

ただの同僚に、父親の出迎えを頼むわけないだろう。気は小さいが、頭は
悪くない。彼氏としてはまずまずのレベルだ。(真也に)まさか、遊びじ
やないだろうな？

いや、僕はぜひと結婚したいと思っています。彼女にもつい先週プロポ
ーズしたんですが――

プロポーズ？ 話はそこまで進んでるの？

でも、彼女はまだ返事をしてくれなくて。この一週間、ずっと下痢が続い
てます。

情けない男だな。プロポーズなんてものは、イエスカノーか聞くものじゃ
ない。何が何でもイエスって言わせるものだ。俺が輝子にプロポーズした
時だって――

やめてよ、そんな昔の話。

まあ、いいじゃないか。(真也に)俺も輝子も大学四年で、まだ卒論も書
いてなかったんだ。それなのに、輝子のお腹に赤ん坊ができちまって。
え？ それじゃ、でき婚？

白 真也 白 石
輝 子 輝 真也
白 石 白 石
輝 子 輝 子
白 石 白 石
輝 子 輝 子
白 石 白 石

でき婚とは何だ。
赤ん坊ができちゃったから結婚する。略して、でき婚です。
そう、それだ。輝子は産むかどうか迷ってたんだが、俺が徹夜で説得した。
で、卒業前に入籍したんだ。
ということ、カオルさんが生まれたのは、ハリーのおかげなんですか？
でも、育てたのは私よ。その人は何もしてない。
何もってことはないだろう。休みの日には、公園へ連れていったし。
そんなの、月に一度か二度じゃない。仕事が忙しいって、何から何まで私
に押しつけて。挙げ句の果てに、一人でアメリカへ。(真也を見て) やめ
ましょう、こんな話は。
おまえ、まだ怒ってるのか？
まさか。とつくの昔に整理がついた。でも、こうしていきなり押しかけて
こられたら、冷静ではいられなくなる。私はあなたに会いたくないって言
ったはずよ。
わかっている。でも、俺はどうしてもカオルの顔が見たくて。いや、正直に
言おう。俺はおまえの顔も見なかった。
幼稚園の仕事が忙しくて、すっかり老けちゃった。二十年前とは別人でし
よう？
そんなことはない。今でもキレイだ。
白々しい。そうやって、キザなセリフをぬけぬけと言うところに騙された
のよね。
幼稚園の経営、大変なのか？
うちは早いうちから、英語教育を採り入れたの。おかげで、この少子化の

白石

輝子

白石

輝子

白石

輝子

輝子が去る。
石神井公園。

時代に、入園希望者は増え続けている。そつちは？
残念ながら、監督になるのはもう少し先になりそうだ。
でも、映画の仕事はしてるんでしょう？
まあな。この前、撮り終わったのは、B級のアクションものだ。大した役
者が出てないから、日本の配給会社は買わないかもしれない。
あなたの映画が見られる日を、楽しみに待ってる。日本にはどれぐらい
られるの？
一週間だ。来週の土曜に成田を発つ。
カオルが帰ってきたら、電話させる。いくら仕事が忙しくても、一晩ぐら
いは何とかなるでしょう。

ブランコが置いてある。

真也

白石

真也

白石

真也

白石

うわー、大きな池ですね。ここは公園か何かですか？
石神井公園だ。初めて来たのか？
僕は生まれも育ちも北千住なんで、こつちの方はほとんど来たことがなく
て。
さつき、カオルを家まで送ってきたって。
ええ、でも、こんなに近くに、こんなに大きな公園があるなんて、知りま
せんでした。ここにはボートがあるんですね。カオルさんと乗ったりした
んですか？
乗った乗った。ここに来るたびに、必ずだ。全部で五十回は乗ったんじや

真也 ないかな。
他の場所には連れて行ってあげなかつたんですか？ 遊園地とか。
俺は仕事が忙しかつたし、給料も安かつた。ここなら、入場料もいら
ない。
白石 ボート代だけで済む。

白石がブランコに乗る。

白石 このブランコにも必ず乗った。子供っていうのは、危ないことをするの
が好きだよな。ブランコをこんな高さまで漕いで、「お父さん、見て見て」
って。

真也 お父さんが見てるから、安心して、危ないことができるんですよ。
なるほど。そうかもしれないな。

白石 どうして日本へ帰ってきたんですか？

真也 輝子とカオルの顔を見るためだ。

白石 なぜ二十年も経ってから？ 今頃帰ってきて、顔が見たいなんて、勝手す
ぎませんか？

真也 そうかな。

白石 当たり前じゃないですか。だって、あなたは奥さんとカオルさんを捨てた
んですよ。

真也 捨てたくて、捨てたわけじゃない。

白石 でも、あなたは家族より仕事を選んだ。自分のやりたいことを選んだわけ
でしょう？

真也 そうだ。だから、輝子に会いたくないと言われても、文句は言えない。カ

白石

真也

白石

オルに約束をすっぱかされても、文句は言えないんだ。

白石がブランコから降りる。

白石　ああ、腹が減った。この近くに、安くてうまい定食屋があるんだ。今でも

真也　潰れてなければの話だが。どうだ、一緒に。

白石　せっかくですけれど、夕食は母が用意してくれてるんで。

真也　そうだ。一つだけいい方法があるぞ。君と二人で飯を食う方法が。凄くイヤな予感がするけど、その方法とは？

北千住の真也の家。明日菜がやってくる。

明日菜　　いかがでしたか、ハリーさん？　うちの母が作った、カツ丼。

白石　　いやあ、絶品だった。久しぶりに本物を食ったって気分だ。

明日菜　　そう思うのは当然ですよ。なんとたって、母はプロですから。

白石　　それはつまり、コックか何かをしてるってことか？

明日菜　　お蕎麦屋さんで働いてるんです。もう十年になるかな。

真也　　十三年だよ。

明日菜　　四捨五入したの。(白石に)　もともと母は調理師だったんですよ。代々木

上原にある消防学校の食堂で働いてたんです。そこに食事をしに来たのが

うちの父で。

白石　　え？　君たちのお父上は消防士なのか？

明日菜　　その頃は消防学校の生徒ですよ。消防士の卵のくせに、母に一目惚れして、

燃え上がっちゃったんだそうです。

そこへ、孝枝がやってくる。四つの茶碗をテーブルの上に置く。

孝枝　　明日菜、その話はそこまで。

明日菜
孝枝

えー？ いいでしょう？ お母さんの栄光の時代の話じゃない。
私の栄光の時代はこれからよ。（白石に）安物のお茶ですけど、よかったら、どうぞ。

白石が茶碗を倒す。お茶がこぼれる。

孝枝
白石

安物はダメですか？（テーブルを拭く）
違います。わざとじゃないんです。俺は近眼の上に老眼で、それなのに、眼鏡が壊れてて。（眼鏡を取り出す）

明日菜

私、新しいのを淹れてくる。

白石

いや、結構。俺はこれで十分だ。（茶碗を取って）まだ少し残ってる。

真也

そう言わずに、僕のをどうぞ。（茶碗を取り替えて）日本茶、ずっと飲み

白石

たかったんでしよう？
すまない。（飲んで）うまい。プロの調理師はお茶の淹れ方まで違います

ね。

孝枝

そうですか？ 急須にお茶葉を入れて、お湯を注いだけですけど。

白石

奥さん、いきなり押しかけてきたのに、おいしいカツ丼とおいしいお茶を

ありがとうございました。これでようやく、日本に帰ってきた実感が湧きました。

孝枝

次はお風呂にしますか？

白石

いや、そこまで甘えるわけには

孝枝

そう言わずに、ゆっくりしていただくさい。こうして四人で話をしてる

と、何だか昔に戻ったみたいで。

明日菜

白石

孝枝

白石

孝枝

白石

孝枝

白石

孝枝

白石

孝枝

白石

孝枝

白石

孝枝

白石

孝枝が茶碗を受け取り、去る。

そうそう、私もそう思った。

(孝枝に) ひよっとして、ご主人とは離婚なさったんですか？

いいえ、殉職したんです。十三年前に。消防士が危険な仕事だったことはわかっていたけど、まさか自分の夫が死ぬとは思っていませんでした。

あなた一人で、お子さんたちを育てたわけですか。

ええ。でも、それほど苦労はしませんでしたよ。真也は高校生だったから、

アルバイトで家計を助けてくれたし、明日菜も家事を。

(白石に) 私も小学五年生だったから、掃除や洗濯ぐらいはできたんです。

しかし、いきなりお父さんがいなくなっただ。やっぱり、淋しかっただ

ろう。

そんなの、当たり前じゃないですか。

(白石に) カオルさんも同じだったと思いますよ。

君に言われなくても、わかっている。

お茶碗、空じゃないですか。おかわり、淹れてきますよ。

いや、僕たちはそろそろホテルへ行かないと。

(孝枝に) じゃ、お言葉に甘えて、もう一杯だけ。

明日菜

白石

孝枝

白石

ハリーさんはハリウッドで仕事をしてるんですよね？ ジョニー・デップ

とかブラッド・ピットに会ったことはありませんか？

その二人と一緒に仕事をしたことはないが、見ろ、このボールペンを。(

ボールペンを差し出して) これはクリストファー・ウォーケンにもらった

ものだ。

明日菜

(受け取って) 誰ですか、その人？

白石

君はクリストファー・ウォーケンを知らないのか？

見てないのか、『デ

イア・ハンター』を。

明日菜

(真也にボールペンを差し出して) 知ってる？

真也

(受け取って) さあ。昔は有名だったんじゃないか？ (目を閉じる)

白石

今だって、有名だ。ほら、『ヘアスプレー』で、ヒロインの父親役をやった、怖い顔の男。まさか、『ヘアスプレー』も見てないのか？

孝枝がやってくる。茶碗を持っている。

孝枝

お待たせしました。真也、あなた、何してるの？

真也

(目を開けて) 別に。

孝枝

別に、じゃないわよ。今、おかしなことをしてたでしょう？

白石

おかしなことって？

明日菜

何でもありません。お兄ちゃん、ボールペンを返して。

真也

ハリー、あなたには信じられないかもしれないけど、僕には人や物についての記憶が見えるんです。このボールペンについてるあなたの記憶も、もちろん見えた。

白石

君は何を言ってるんだ？

真也

病院だ。あなたは白衣を着た男と話をしている。言葉は英語だ。何を話しているかはわからない。でも、二人が言い争っているのはわかる。あ、あなたがこのボールペンを床に叩きつけた。袖が見えた。あなたも白衣を着

ている。そうか。あなたは男の同僚なんだ。

白石が真也の手からボールペンを奪い取る。

真也

昼間見たハンカチにも、似たような記憶がついていた。そこは病院で、あなたは白衣を着ていた。ハリー、これは一体どういうことです。映画の仕事をしている人間が、なぜ白衣を着るんです。

白石

真也

白衣？ 病院？ 俺には何のことだかさっぱり――僕の推理を言いましたよ？ あなたは嘘をついてるんだ。あなたは映画の仕事なんかしてないし、映画スターに会ったこともない。どこかの病院で、看護師か何かをしているんだ。

白石

真也

黙れ。
認めてください。自分が嘘をついたことを。

白石が真也につかみかかる。真也が白石を突き飛ばす。白石が倒れる。

明日菜

白石

孝枝

白石

真也

白石

明日菜

大丈夫ですか、ハリーさん？

心配するな。ちよつとバランスを崩したただけだ。

真也、ハリーさんに謝りなさい。

(真也に)俺は嘘なんかついてないぞ。

じゃ、僕が見たものは何だったんです。

なぜそこまで自分に自信を持つ。自分が神にでもなったつもりか。

こちらへどうぞ。

白石・明日菜・孝枝が去る。
真也の家の前。真也が携帯電話を取り出す。別の場所に、カオルがやってくる。携帯電話を持っている。

カオル

古川さん？　今まで連絡しなくて、ごめんなさい。

真也

多賀先生に捕まってきたんだろ？　ようやく解放してもらえたの？

カオル

今、家に帰ってきたところです。古川さんこそ、うちの父にあちこち引っ

真也

張り回されたんでしょう？

カオル

ああ、会社へ行つて、君の家へ行つて、石神井公園へ行つて――

真也

石神井公園？　どうしてそんな所へ？

カオル

君が子供の頃、よく遊びに行つたんだろ？　それで懐かしくなったんじゃないかな。

真也

ホテルへ送り届けてもらっただけのつもりだったのに、本当にごめんなさい。

カオル

いや、僕には、君に謝ってもらおう資格はない。ハリ―は今夜、僕の家泊

真也

まることになったんだ。僕が突き飛ばしたせいで、腰を痛めちゃつて。

カオル

ハリ―って？

真也

君のお父さんだよ。ロサンジェルスではハリ―って呼ばれてるんだ。知らないの？

カオル

だって、私、二十年も会ってないから。

真也

でも、電話や手紙のやりとりはしてたんだろ？

カオル

毎年、私の誕生日に手紙とプレゼントを送ってくれたけど、私は一度も返

カオル

事を出さなかった。今度の帰国だって、いきなり手紙で、「成田へ迎えに

真也
カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也が去る。
カオルの家。

カオルが携帯電話を切る。そこへ、輝子がやってくる。

来いーって、それだけ。
それじゃ、ハリーのことはほとんど何も知らないんだ。
だから、古川さんの力を借りようと思ったんですよ。で、どうでした？
何かわかりました？
何かって？
だから、日本に帰ってきた目的ですよ。
それがよくわからなかったんだ。記憶を見るチャンスがなかなかなくて。
そうですか。
ハリーは明日の朝まで家にいる。その間にもう一度、挑戦してみるよ。
迷惑じゃないんですか？ 見ず知らずの人間を泊めるなんて。
見ず知らずじゃない。ハリーは君のお父さんじゃないか。それじゃ、また
明日。
おやすみなさい。

輝子
カオル
輝子
カオル
輝子
カオル

あの人が、古川さんのお宅に泊まるの？
そうみたい。いくら古川さんが優しいからって、甘えすぎだよね。
それはあなたも同じじゃない？ あの人の出迎えを古川さんに押しつけて。
それは、急に会社に呼び出されて、仕方なく。
本当？ いい言い訳ができたって、喜んで行ったんじゃないの？
わかる？

輝子
カオル

それで、あの人にはいつ会うの？ 明日？
明日はダメ。多賀先生に、資料探しを頼まれちゃって。

輝子
カオル

そんなにあの人と顔を合わせるのがイヤ？
正直言って、あんまり気が進まないな。二十年も帰ってこなかったのに、

輝子
カオル

どうして今頃になって。何か企んでると思わない？
何かって？

輝子
カオル

たとえば、日本へ帰ってこようと思ってるとか。
それはないんじゃないかな。あの人には映画の仕事があるし。

輝子
カオル

お母さんは信じてるんだ。
何を？
私は信じない。あの人の言うことは何も。

カオル・輝子が去る。

メイプル社。真也がやってくる。反対側から、岩沼・名取がやってくる。

真也
名取
ただいま戻りました。
古川さん、部長から聞きましたよ。とうとうカオルさんにプロポーズした
んですって？

真也
岩沼
部長、あなたの機密保持能力はたったの一日ですか？

岩沼
名取
そう言うな。俺は名取にも協力を仰いだ方がいいと思ってるな。

岩沼
名取
（真也に）もちろん、協力しますよ。だって、古川さん、カオルさんが入
社した時から、ずっと好きだったんでしょ？

岩沼
名取
それなのに、彼女は見向きもしないで、君原先生と付き合い始めた。一時
は結婚なんて話もあったんだ。

名取
（真也に）で、カオルさんの感触はどうなんです？ オーケーしてもらえ
そうですか？

真也
それがいまだに返事をしてくれないんだ。一日過ぎるごとに、希望という
名の花が萎れていく。

名取
岩沼
カオルさん、まだ引きずってるのかな、君原先生のこと。
それはないだろう。別れて、もう二年だぞ。

名取
でも、カオルさんは結婚するつもりだったんでしょ？ あの人のとって

岩沼 は、一世一代の恋だったんですよ。
もう少し待つべきだったのかもしれないな、プロポーズ。
真也 でも、僕は再来月で三十になっちゃうんです。

そこへ、カオルがやってくる。

カオル 部長、私、多賀先生のお宅へ行ってきました。

岩沼 今度は何だ。
カオル 青葉さんが表紙のラフを送ってくれたんですよ。先生に電話したら、今すぐ持ってこいって。

岩沼 わがままな人だな。君の担当はあの人だけじゃないのに。

カオル 先週、怒らせちゃったでしょう？ あの時、先生に約束したんです。この本が出来上がるまで、先生の仰ることは何でも聞きますって。

岩沼 嫁入り前の娘がそんな無茶な約束をするんじゃない。
真也 大庭君、忘れてないよね？ 今夜の約束。

カオル 午後七時に、新宿のクリントンホテルのロビーですよね？ わかっています。
名取 またハリーとお食事ですか？

真也 また、じゃないよ。大庭君は一昨日も、そのまた前も、ドタキャンしたんだから。

名取 え？ じゃ、いまだにハリーと食事してないんですか？

真也 それどころか、会ってもない。ハリーは、仕事だから仕方ないって言うてるけど。
名取 ちよっと待ってください。ハリーはいまだに、古川さんのお宅に泊まって

真也

るんですか？

うちの母の食事がすっかり気に入ったみたいで。それに、ハリーは日本が
久しぶりだから、道案内が必要なんだ。その点、妹は大学院生で、暇な時
間がいっぱいあるし。

名取

で、妹さんがガイド役を？ それって、本来なら、カオルさんがやるべき
仕事なんじゃ。

カオル

バカなことを言わないでよ。私は多賀先生の相手をするだけで精一杯。

真也

でも、今夜だけは何とか都合をつけて、来てほしい。ハリーは明日、ロサ
ンジェルスへ帰るんだから。あれ？ 電話だ。

真也が携帯電話を取り出す。別の場所に、明日菜がやってくる。携帯電話を持っている。

真也

どうした、明日菜？

明日菜

お兄ちゃん、今、暇？
会社員に向かつて、よくそんな質問ができるな。もちろん、仕事中だ。

真也

仕事中でも、来てほしい。ハリーさんがいなくなっちゃったのよ。
ハリーがいなくなっただけ？ 一体、どういうことだ。

明日菜

今日は、府中へ行ってきたのよ。ハリーさんの友達に会いに。で、新宿ま
で戻ってきたら、いきなり、ちよつと寄る所があるって。

真也

おまえは今、どこにいるんだ。
JR 新宿駅の東口の改札の前。

明日菜

わかった。今から行く。

真也が携帯電話を切る。明日菜が去る。

名取

岩沼

真也

岩沼

真也

岩沼

カオル

真也

岩沼

岩沼

岩沼

岩沼・名取が去る。
新宿駅の改札口。明日菜がやってくる。

明日菜

真也

明日菜

カオル

明日菜

真也

ハリーが行方不明になったんですか？
子供じゃないんだ。迷子になったら、交番で道を聞くだらう。
でも、おかしいじゃないですか。今までずっと明日菜と行動を共にしてきたのに、なぜ急に一人で。
若い女の子が一緒だと困る所へ行ったんじゃないか？メイド喫茶とか。
その可能性がないとは言いません。でも、もし事故にでも遭ったりしたら。
カオルちゃん、行こう。
私は多賀先生のお宅へ行かなきゃいけないんです。
新宿は通り道だろう？とにかく、一緒に新宿まで行くんだ。部長、急な話で申し訳ありませんが、半休をください。
俺はメイド喫茶に賭けるがな。おまえの気が済むなら、行ってこい。

お兄ちゃん！
ハリーを見失ったのは、この辺りなのか？
そう。そちらはもしかして、カオルさん？
明日菜さんですね？父がいろいろとお世話になってます。
いいえ、私の方こそ、こんなことになっちゃって、本当にすみません。
いなくなっただけから、何分ぐらい経つ？

明日菜

一時間ぐらいかな。

真也

それなら、まだ見えるかもしれない。(目を閉じる)

カオル

古川さん？

明日菜

話しかけないでください。あの力を使うには、集中が必要なんです。

白石が通りすぎる。真也が目を開ける。

真也

あっちだ。ハリーはあの階段で地上へ出た。

明日菜

行こう、お兄ちゃん。

真也

(カオルに)君も行くだろう？

カオル

私は多賀先生のお宅へ行かないと。

真也

多賀先生とハリーと、どっちが大事なんだ。

カオル

そんなに深刻に考えることないんじゃないかな。十中八九、取り越し苦労

真也

だと思えます。

真也

カオルちゃん！

カオルが去る。

明日菜

カオルさんの言う通りかもしれないよ。私たち、深刻に考えすぎなのかもしれない。

真也

それなら、なぜ俺をここに呼びつけた。

明日菜

わかってるでしょう？ お父さんのことを思い出したからよ。お兄ちゃんはどうしてここに来たの？

真也
おまえと同じだ。行こう。

真也・明日菜が去る。

西武新宿駅の前。白石が通りすぎる。後を追って、真也・明日菜がやってくる。

真也
西武新宿駅か。おまえ、西武線に乗ったことはあるか？

明日菜
一度もない。これって、どこへ行くの？ 八王子？

真也
バカ、それは中央線だ。

明日菜
じゃ、どこへ行くのよ。

真也
こんな所で兄妹喧嘩をしてる場合じゃない。とにかく、電車に乗ろう。

真也・明日菜が去る。

西武新宿線の車内。白石が通りすぎる。後を追って、真也・明日菜がやってくる。

明日菜
（外を見て）電車がホームに入ったよ。今度の駅は上石神井。

真也
石神井ってことは、石神井公園の近くなのかな。（目を閉じる）

明日菜
どう？ 見える？

真也
（目を開けて）見えた。ハリーはこの駅で降りてる。（膝をつく）

明日菜
大丈夫？

真也
こんなに力を使うのは初めてだからな。（立ち上がり）もう大丈夫だ。降りよう。

真也・明日菜が去る。

上石神井駅の前。白石が通りすぎる。後を追って、真也・明日菜がやってくる。

明日菜　今のバスを見た？　大泉学園行き。カオルさんの家って、大泉学園にある

んだよね？

真也　そうか。ハリーはカオルちゃんの家へ行ったんだ。

明日菜　カオルさんに会うために？　でも、今夜は一緒に食事をする約束でしょう？

真也　またドタキャンされるかもしれないって思ったんだろう。（目を閉じる）

明日菜　それならそうと言ってくれればいいのに。

真也　（目を開けて、膝をつく）

明日菜　お兄ちゃん、もう見なくていいよ。行き先はわかったんだから。

真也　途中で何が起こるか、わからないだろう？　ハリーはタクシーに乗った。

俺たちも乗ろう。

真也・明日菜が去る。

石神井公園。白石が通りすぎる。後を追って、真也・明日菜がやってくる。

明日菜　どうして途中で降りるのよ。

真也　ハリーがここで降りたからだよ。ハリーの目的地はカオルちゃんの家じゃ

ない。ここだったんだ。

明日菜　ここは公園？

真也　石神井公園だ。ハリーとカオルちゃんは昔、よくここへ来たんだ。

真也がブランコに触り、目を閉じる。

明日菜
真也

明日菜

ハリーはそのブランコに乗りに来たの？
そう思ったんだけど、おかしいな。ハリーの記憶は見えない。待てよ。この記憶は。
ねえ、見て。あそこにパトカーが。

そこへ、警官がやってくる。

明日菜
警官

すみません。事故か何か、あつたんですか？

あなた方は？

僕たちは通りすがりの者ですけど、ちよつと人を探してまして。

真也
警官

どんな人ですか？

真也

性別は男で、年齢はちようど五十歳。僕の知人の父親なんです。

警官

その人の名前は？

真也

ハリー。

明日菜

(警官に)いいえ、ハリーはあだ名で、本名は白石晴男です。

警官

その人なら、今、救急車で病院へ運ばれました。三十分ほど前に、車に撥

明日菜

ねられたんです。
そんな……。ハリーさん！

真也・明日菜・警官が去る。

高野台にある病院の廊下。白石・医師がやってくる。白石は頭に包帯を巻いている。

医師

白石さん、あなた、一人で帰るんですか？

白石

ご心配なく。できるだけゆっくり歩いていきますから。

医師

ご自宅はどちらです。

白石

ロサンジェルスウェスト・ハリウッドです。でも、今は北千住の知人の

家に泊まっています。

医師

ここから北千住だと、一時間近くかかる。その知人の方に迎えに来てもら

白石

った方がいいんじゃないですか？

白石

そんなワガママは言えません。知人と言っても、知り合ったのは、ほんの

一週間前なんだから。

そこへ、真也・明日菜がやってくる。

明日菜

ハリーさん！

真也

(白石に) その包帯は？ 立ったりして、大丈夫なんですか？

白石

ただのかすり傷だ。脳には何の異常もなかった。

明日菜

よかった。救急車で運ばれたって聞いたから、心配したのよ。

医師
白石
医師

（白石に）こちらが北千住の？
ええ。これで一人で帰らずに済みそうです。
安心しました。これから外出する時は、もっと慎重に行動してください。
それじゃ。
お世話になりました。

医師が去る。

真也
白石

（白石に）車に撥ねられたんだそうですね？
いや、車とは全く接触してない。向こうがクラクションを鳴らしてくれたんで、咄嗟に避けることができたんだ。でも、よろけて、倒れて、頭を打ったんだな。それで気を失ったんだ。

真也
白石

相手の車は？
そのまま走り去った。

明日菜
白石

ひどい。倒れた人をそのままにしていくなんて。

明日菜
白石

俺は横断歩道のない所を渡ろうとしたんだ。悪いのは百パーセント、俺だ。目が悪いくせに、どうしてそんな危ないことをするのか。やっぱり、一人で行かせるんじゃないか。

白石

心配をかけて、済まなかった。しかし、俺がここにいるってよくわかったな。まさか、新宿駅から尾行してきたのか？

真也
白石
明日菜

違いますよ。あなたの記憶を追いかけてきたんです。
嘘をつくな。
嘘じゃない。お兄ちゃんは、新宿駅からここまで、ずっとあの力を使い続

白石
明日菜
白石

真也

白石
真也

白石
真也

白石
真也

真也の家。孝枝がやってくる。

孝枝

けてきたの。ハリーさんのために。

何があの力だ。バカバカしい。

どうして信じないの？ お兄ちゃんには本当に記憶が見えるのよ。

よし、じゃ、見えると仮定してみよう。ここは新宿駅だ。一日に何万人も

の乗降客が通りすぎる。ということは、何万もの記憶が残っているはずだ。

その中から、どうやって俺の記憶を見つけた。

普通の人の記憶なら、難しかったでしょうね。でも、あなたの記憶には特

徴があった。

特徴とは何だ。

僕は六日前に、あなたの記憶を見た。ボールペンとハンカチについてた記

憶です。その記憶は、視野が極端に狭かった。見える部分もかなり薄ぼん

やりしてて、ほとんどピントが合ってなかった。

目が悪い人間は他にもいっぱいいる。

その通りです。しかし、ただの近眼だったら、視野が狭くなることはない。

ハリー、近眼ていうのは嘘でしょう？

近眼じゃなければ、何だって言うんだ。

緑内障か白内障か、とにかく目の病気です。あなたは視力を失いかけてる

んだ。違いますか？

お帰りなさい、ハリーさん。お怪我がなくて、何よりでした。

白石が去る。

孝枝

明日菜

孝枝

私、何か、まずいことを言っちゃったかしら。
お母さんのせいじゃない。ハリーさん、病院を出た時から、ずっと黙り込んでる。
病院で何かあったの？

そこへ、白石が戻ってくる。トランクを持っている。

白石

真也

白石

真也

白石

真也

白石

真也

白石

真也

真也、このトランクを開けてみる。

何のために？

この中に入ってる物の記憶を見るんだ。そうすれば、俺が嘘をついてないことがわかる。

嘘って？

おまえは六日前にこう言っただろう。あなたは映画の仕事なんかしてない、看護師をしてるって。

看護師って断定したわけじゃありません。とにかく、白衣を着る仕事です。

それが事実かどうか、確かめてみる。

いいんですか？ 僕は自分が見たことを、カオルさんに話すかもしれないよ。

いや、必ず話す。おまえはカオルに頼まれたんだろう？ 俺のことを探ってくれと。

気づいてたんですか。

白石　　実の娘に疑われるとは、情けない話だよな。しかし、間違った報告をされるのも困る。さあ。
真也　　わかりました。

真也がトランクを開ける。辞書を取り出す。

白石　　辞書か。それは二十年前に、アメリカへ行く前に買ったものだ。
真也　　（目を閉じて）教室だ。あなたは机に向かつて、授業を受けている。先生は白人で、英語をしゃべってる。ここはアメリカの大学なんだ。先生はアメリカで、英語をしゃべってる。ここはアメリカの大学なんだ。映画会社に入るには、大学で映画を学んでいることが必須の条件。ところが、俺は早稲田の法学部出身だった。その後、映画の現場に八年いたが、そのことは全く評価してもらえなかった。だとしたら、仕方ない。俺は三十歳で、カリフォルニア大学に入った。もちろん、映画専攻だ。

真也がサンングラスを取り出す。

白石　　サンングラスか。それは大学時代に買ったものだ。
真也　　（目を閉じて）プールだ。ただし、水は入ってない。あなたは、デッキブラシで床を擦ってる。両手は日焼けで、真っ黒だ。
白石　　夏休みのアルバイトだ。何しろ、学費と生活費を稼がなければならなかったからな。四年の間に、あらゆる仕事をやった。プール掃除、芝刈り、皿洗い。アメリカの大学の学費は高いから、いくら働いても追いつかない。

おかげで、食事は一日一食だった。たまに水だけって時もあったがな。

真也が帽子を取り出す。

白石
真也

帽子か。それは映画の仕事に就いて、最初に買ったものだ。

(目を閉じて) スタジオだ。人がたくさんいる。天井には、照明機材がいっぱい吊ってある。カメラの前で、二人の男が拳銃を向け合ってる。二人が同時に撃った。

白石

俺が初めて参加した映画だ。四年もかかって、ようやく撮影現場に立てたのに、俺の仕事は照明機材のセッティング。二十二、三の頃にやってた仕事だ。しかし、新米に文句は言えない。年下の上司にガーガー怒鳴られながら、俺は現場を駆けずり回った。

真也がシャツを取り出す。が、シャツを落として、トランクに倒れ込む。

明日菜

お兄ちゃん！

ハリーさん、これ以上は無理です。

真也はどうしたんです。

体が熱い。たぶん、力を使いすぎたんだと思う。

真也、あなたの部屋へ行こう。立てる？

ハリー、あなたを嘘つきよばわりして、すみませんでした。

わかってくれば、それでいい。

でも、一つだけ引かかるところがある。僕はあなたが白衣を着ている姿を

真也
白石

白石
真也

見た。あれは一体何だったんです。
さあな。誰か、別の人間の記憶だったんじゃないか？
それはありえない。僕にはあなたの声が聞こえた。英語だったけど、間違
いなく、あなたの声だった。

白石

声の似ている人間はたくさんいる。

明日菜

ハリーさん、本当のことを言ってみて。

白石

明日菜、おまえまで疑うのか？

明日菜

だって、ハリーさんは目の病気なんじゃないか？ お兄ちゃんが見たのは、

白石

白衣じゃなくて、手術着だったんじゃない？ ハリーさんは手術を受けた

白石

んじゃない？
カオルには絶対に言わないって約束するか。

明日菜

(うなづく)

白石

俺は去年、ベーチェット病にかかった。医者には近い将来、失明すると言

明日菜

われた。だから、映画の仕事を辞めて、鍼灸学校に入ったんだ。

孝枝

鍼灸学校？
鍼とお灸の学校よ。

白石

(真也に)おまえが見たのは、おそらく実習授業の時のものだ。同級生の

真也
白石

白人に差別的なことを言われて、喧嘩になったんだ。まさか、あんなつま
らない記憶がついているとはな。
それじゃ、あなたが帰国した目的は。
言っただろう。カオルと輝子の顔を見るためだ。この目が光を失う前に。

真也・白石・明日菜・孝枝が去る。

新宿クリントンホテルのラウンジ。カオルがやってくる。手紙を開いて、読む。

カオル

「カオルへ。誕生日、おめでとう。本当は直接会って、おめでとうと言いたいのだけれど、お父さんは今、日本へ帰れません。ごめんね。お父さんは今、学校に通っているのです。机に向かって勉強するのは久しぶりなので、とても苦勞しています。でも、カオルも毎日学校で頑張っているのだから、自分も頑張ろう。そう思って、必死で先生の話を聞いています。上の前歯は生えてきましたか？身長は何センチ伸びましたか？九歳になったカオルの姿が見てみたいので、ぜひ写真を送ってください。楽しみに待っています。お父さんより」

そこへ、真也・白石がやってくる。

真也
カオル

ごめんね、カオルちゃん。待たせちゃったよね？二十五分の遅刻。あと五分経ったら、帰ろうと思ってました。（白石の頭を見て）その包帯は。

白石
カオル

気にするな。大した怪我じゃない。

真也
カオル
真也
白石
真也
白石
真也
白石
真也
白石
真也
白石
カオル
白石
真也
カオル
白石
カオル

ハリーは車に撥ねられそうになったんだ。石神井公園のすぐ近くで。ハリーはメイド喫茶じゃなくて、石神井公園へ行ったんだ。

そんな所へ何をしに？

それはまだ聞いてなかったな。(白石に) 何をしに行ったんですか？

ただの散歩だ。先週行った時は夜だったろう。昼間の石神井公園を、もう

一度、この目に焼き付けておきたかったんだ。

でも、焼き付ける前に、事故に遭っちゃったんですね？

明日菜を置いて、一人で行った報いだ。

なぜ一人で行ったんです。明日菜に言うのが、恥ずかしかったんですか？

違う。

じゃ、どうして。

今から考えるとバカバカしいんだが、カオルに会えるかもしれないと思っ

たんだ。

会えるわけじゃないじゃないですか。カオルちゃんはその時、会社にいたんですよ。

そうじゃない。俺が会えると思ったのは、八歳のカオルなんだ。

バカバカしい。

そうだよな。でも、あの時は本気でそう思ったんだ。

八歳のカオルちゃんには会えなかったけど、二十八歳のカオルちゃんには

会えましたよ。よかったですね。

(カオルに) よく来てくれた。礼を言う。

お礼なら、古川さんに言っただけ。今日来なかったら、一生許さない。部長や

名取君と協力して、職場イジメをするって脅されたの。

白石
真也

（真也に）やり方はともかく、君の協力には感謝する。ありがとう。じゃ、僕は会社へ戻ります。後で迎えに来ますから。カオルちゃん、ハリ―は事故で頭を打ってるんだ。だから、レストランへ行く時は、手を引いてあげてくれ。じゃ。

真也が去る。

白石
カオル
白石

真也の話は大げさだ。ただのかすり傷で、脳には何の異常もなかった。すつかり仲良くなったのね、古川さんと。一週間も一緒にいるからな。あいつはなかなかいい男だ。見かけはヤワだが、芯はしっかりしている。結婚相手としてはまずまずだぞ。

カオル

褒めてるんだ。娘を嫁にやる父親としては、最大限の褒め言葉だぞ。

カオル

私だって、いい人だとは思ってる。結婚相手としては申し分ないって。

白石
カオル

じゃ、プロポーズはオーケイするのか。わからぬ。今は結婚なんて考えられないの。今すぐ答えをって言われたら、ノーとしか言えない。

白石

俺のせいかな？俺のせいで、男って生き物が信じられなくなったのか？全然違う。私はもう二十八だよ。死ぬほど好きになった人もいた。

白石
カオル

でも、その人とは一緒にいられなかったのか？

カオル

その人のことがまだ好きなのか。関係ないでしょう、お父さんには。

白石
カオル
白石
カオル
カオル
白石
カオル

やっと呼んでくれたな、お父さんて。
だって、他に呼び方がないでしょう？ 私はハリーなんて呼ばないからね。
俺だって、お父さんて呼ばれた方がうれしいさ。じゃ、そろそろレストラ
ンへ行くか。
（白石の腕を持つ）
怪我は本当に大したことないんだ。
無理しないで、娘の好意に甘えたら？

白石・カオルが去る。
ホテルの外。真也がやってくる。携帯電話をかける。別の場所に、輝子がやってくる。

輝子
真也
輝子
真也
輝子
真也
輝子
真也
輝子
真也

どうしたの、古川さん？ カオルのやつ、まだそっちへ行っていないの？
いいえ、今日は来ました。今、ハリーと二人で、最上階のレストランへ。
よかった。で、私に電話してきたのは？
今から三時間後に、そちらへ行きます。カオルさんを送って。その時、ハ
リーに会っていただけませんか？
あの人にそう言えただけ頼まれたの？
いいえ、これはあくまでも、僕の一存で。
だったら、それはいわゆる、余計な口出しよ。私と白石のことは、あなた
には何の関係もないはず。
その通りです。でも、僕はどうしても、お母さんに会ってほしいんです。
もう一度だけ、ハリーに顔を見せてやってほしいんです。
古川さん、私はあの人のことを憎んでも嫌ってもいない。とっくの昔に、

真也
輝子

赤の他人になったから。だから、あの人に会う理由もないの。そうだと思います。でも、ハリーにとっては、赤の他人じゃないんです。今夜も人に会う約束があるの。悪いけど、家にはいないと思う。じゃ。

輝子が去る。
石神井公園。
真也が携帯電話を切る。
白石・カオルがやってくる。

カオル

うわー、暗い。私、夜に来たのは初めて。

真也

僕は先週、ハリーと来たよ。カオルちゃんの家に行った帰りに。

カオル

知ってます。父に無理矢理連れてこられたんでしょう？

白石

俺はここが大好きなんだ。昔、俺と遊びに来たことは覚えてるか？

カオル

全然。

白石

嘘だろう。おまえはこのボートに乗るのが好きだったんだぞ。

カオル

小さい頃のことって、よほど大きな事件でない限り、記憶に残らないんじゃないかな。運動会とか、卒業式とか。

白石

このブランコは？ここに来るたびに、必ず乗ってたんだ。

カオル

そうなの？

白石

最初は一人じゃ乗れなくて、俺の股の間に座って乗ってたんだ。そのうち、

カオル

一人で乗るって言い出して、でも、うまく漕げないから、俺が後ろについ

てやっつて。

カオル

悪いけど、本当に覚えてない。私にとっては、大事件じゃなかったんだと

真也

思う。

カオル

カオルちゃん、嘘はやめよう。

カオル
真也

カオル
真也

カオル

真也
白石

真也
白石

カオル
白石

カオル

白石
カオル

真也
カオル

白石
カオル

嘘って？

僕は昼間、ここへ来た時、このブランコについてる記憶を見たんだ。それは君の記憶だった。左の手首にその時計をしてたから、たぶん、最近の記憶だ。君は最近、このブランコに乗ったんだ。

乗ってません。

僕の話聞いて、懐かしくなったんだろう？ 小さい頃のことを思い出し

たんだらう？

古川さん、人のことを勝手に決めつけないでください。

そうか。じゃ、もう一度、このブランコについてる記憶を――

真也、もういい。

でも、ハリー。

カオル、今日はここで別れよう。ここからなら、一人で帰れるよな？

どうせなら、家まで来れば？

家には輝子がいるだろう。またいきなり押しかけて、不愉快な思いをさせたくない。最後に一つ、頼みがある。もう一度、おまえの顔を近くで見せてくれ。

食事をする時にさんざん見たでしょう？

もっと近くで見たいんだ。

でも、何だか照れ臭いな。

いいじゃないか、最後なんだから。

わかった、わかった。こんな顔でよかったら、どうぞ。（白石に歩み寄る）

ああ、やつとはつきり見えた。

そんなに目が悪いのに、どうして新しい眼鏡を買わないわけ？

真也
白石

カオルちゃん、ハリーは——
よし、オーケイだ。おまえの顔はこの目に焼き付けた。これで心置きなく、

カオル
白石

ロサンジェルスへ帰れる。
本当に、このためだけに帰国したの？ 私の顔を見るためだけに。

カオル
白石

手紙にそう書いたはずだ。
古川さん、今、何か言いかけなかった？

カオル

いいから、帰れ。明るい道を選んで、帰るんだぞ。
わかった。今夜はありがとう。おやすみなさい。

カオルが去る。

真也
白石

いいんですか、これだけで？
十分だ。日本へ来た目的は果たした。
なぜカオルちゃんに本当のことを言わないんです。言えば、カオルちゃん
の態度だって、変わったはずだ。ひよっとしたら、このまま日本にいてほ
しいって言ったかもしれない。

白石
真也

俺は日本で暮らすつもりはない。
でも、アメリカへ戻って、どうするんです。映画の仕事はもうできないの
に。

白石

鍼灸師になるのさ。俺の友達は、みんな映画の仕事をしてる。重労働で、

背中や腰にガタが来てるヤツが多い。そいつらの体を少しでも楽にしてや
りたいんだ。それでそいつらがいい映画を作ってくれば、俺は満足なん
だ。

真也

白石

真也

白石

真也

白石

白石がブランコに乗り、手紙を開く。別の場所に、カオルがやってくる。真也は去る。

カオル

「お父さんへ。誕生日のプレゼント、ありがとうございます。でも、私はもう小学三年生なので、人形遊びはしません。だから、おじいちゃん幼稚園に寄付しました。お父さんは映画の仕事をするために、アメリカへ行ったんですよ？ それなのに、どうして学校に通っているのですか？ 学校だったら、日本にもたくさんあります。どうして日本の学校ではダメなのですか？ 私は人形なんかより、お父さんに会いたいです。私の写真は送れません。私の顔が見たかったら、日本に帰ってきてください。一日でも早く。カオル」

カオルが去る。

メーブル社。真也・岩沼・名取がやってくる。真也はトランクを持っている。

岩沼 すみませんね、わざわざ来ていただき。
白石 いや、この前来た時は、仕事の邪魔をしたし、紅茶もこぼしたし。日本を

名取 発つ前に、ぜひ一言謝っておこうと思つて。

白石 立つ鳥跡を濁さずですね？ 僕もハリーさんに挨拶ができて、うれしいです。アン・ハサウエイへの伝言、くれぐれもよろしくお願いします。

名取 わかつてる。ところで、カオルは？
白石 今日は休みじゃないかな。
名取 いや、昨日、鉄道博物館で撮ってきた写真を、多賀先生の所へ持っていく

岩沼 土曜なのに？
名取 僕は先週も今週も出勤してますよ。

岩沼 出版カタログが完成するまでの辛抱だ。我慢しろ。

白石 ということは、カオルはここへは来ないのか？

名取 さあ。早めに終われば、顔を出す可能性もありますが。
真也 無理無理。また多賀先生に捕まって、夜まで相手をさせられますよ。

真也 ハリー、あなたはカオルさんに会いたいですか？

白石
真也
白石
真也
岩沼
真也

そういうわけじゃないが、最後にもう一度、顔が見られたらと。でも、あなたは昨夜、カオルちゃんの顔はこの目に焼き付けたって。ああ、焼き付けた。確かに焼き付けたんだが。
(白石の手をつかんで) ちよつとこつちへ来てください。
どうした、古川？
何でもありません。部長はそこにいてください。

真也が白石の腕をつかみ、部屋の隅へ引っ張っていく。

真也

このジャケット、昨夜も着てましたよね？ (白石の上着をつかみ、目を閉じる)

白石

真也

何をする気だ。まさか、俺の記憶を？
なんだ、これは！これがカオルちゃんの顔？ピントが全然合っていないじゃないですか。

白石

この一週間で、予想以上に視力が落ちたんだ。おまけに、レストランも石神井公園も暗かったし。

真也

白石

真也

白石

真也

名取

真也

(目を開けて) ひよつとして、お母さんの顔もピンボケですか？
輝子と会ったのも、夜だったから。
バカ！バカバカ！こんな大事なことをなぜ今まで隠してたんです。いや、あなたを責めてる暇はない。名取、頼みがある。僕のかわりに、ハリ―を成田へ連れていってくれ。(トランクを差し出す)
(受け取って) 古川さんはどこへ？
ハリ―はもう一度、カオルちゃんとお母さんに会いたいんだそうだ。だか

白石　　ら、僕は二人を迎えに行く。
真也　無理だ、真也。あの二人が来てくれるはずがない。
岩沼　そんなの、わかりませんよ。僕が命懸けで説得してみせます。
真也　焦るな、古川。おまえ一人で、二人の説得は無理だ。大庭君は俺に任せて、
岩沼　おまえはお母さんの所へ行け。
真也　部長も協力してくれるんですか？
岩沼　見送りの人数は多ければ多いほどいい。湿っぽくならず済むからな。行くぞ。

真也・岩沼が去る。

白石　出版カタログはいいのか？
名取　大丈夫です。明日も出勤しますから。

成田空港の出発ロビー。明日菜・孝枝がやってくる。

明日菜　ハリーさん！
白石　明日菜、見送りに来てくれたのか？
明日菜　お兄ちゃんからメールが来て、「今すぐ、成田へ行け」って。
孝枝　（白石に）私にも来たんですよ。（携帯電話を出して）「見送りの人数は多ければ多いほどいい」って。
名取　それ、部長の受け売りです。
白石　（明日菜に）挨拶は朝、家を出る時にしたのに。

明日菜
名取
明日菜

私もそう思ったんだけど、一つ、ハリーさんに言い忘れたことがあって。言い忘れたこと？

(白石に)私のお父さんは勇敢な消防士だったけど、ひどい大酒飲みだったの。酔っ払うと、やたらと乱暴になって、お母さんなんか、しょっちゅう泣かされてた。そうだよ、お母さん？

孝枝

そうそう。(白石に)でもね、そんな人でも、今は許せる。二度と会えないと思うと、やっぱり淋しいんです。

名取

わかるなあ、その気持ち。あの、あなたは？

明日菜

そこへ、真也・輝子がやってくる。

真也

ハリー！お母さんをお連れしましたよ。輝子、来てくれたのか。

白石

私は「仕事があるから行けない」って言ったの。でも、古川さんが玄関で土下座するから。

白石

(真也に)俺のために土下座までしてくれたのか？

真也

時間がないから、手っ取り早くと思っただけ。すまない、真也。(小声で)病気のことは話してないだろうな？

白石

(小声で)話してません。それでも、お母さんは来てくれたんです。あなたのために。

明日菜

何をこそ話してるの？
何でもなし。

そこへ、カオル・岩沼がやってくる。

岩沼

真也

岩沼

カオル

輝子

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

カオル

真也

白石

カオル

白石

カオル

カオル

ハリーさん！遅くなって申し訳ない。

部長、カオルちゃんは？

もちろん、連れてきた。多賀先生が行かせまいとしたから、「うちの社員

を私物化するな」って、怒鳴りつけてやった。

お母さんまで来たの？ どうして？

私も無理矢理連れてこられたの。古川さんに。

古川さん、これはどういうことですか？ また父に頼まれたんですか？

違う。これは全部、僕が決めたことだ。僕は君とお母さんにも、ハリーを

見送ってほしかった。だから、部長と名取に協力してもらったんだ。

でも。

いいから、黙って、ハリーの前に立って。

また顔を見せろって言うの？ それは昨夜、石神井公園で。

もう一回だけ。一回だけでいいから、頼む。君がウンて言ってくれないな

ら、ここで土下座して――

土下座なんかしなくていい。（白石に歩み寄って）これでいいですか？

ありがとう。どうですか、ハリー？

（首を横に振る）

どうしたの？

何でもない。

でも、何だかやけに悲しそう。まるで、永遠の別れみたい。

白石
カオル

白石

カオル
白石

その可能性もないとは言えないだろう。俺ももう五十だし。もうじゃなくて、まだ五十よ。東京とロサンジェルスなんて、飛行機で十時間ちよつとでしよう？ 休みが取れたら、また来ればいいのよ。

その時は、また会ってくれるか？

会うよ。こんな顔でよかつたら、いつでも見せてあげる。
真也、俺は前にこう言ったな？ 俺が日本へ来たのは、カオルと輝子の顔を見るためだつて。今になつて、ようやくわかつた。俺はカオルの気持ちも、輝子の気持ちも考えてなかつた。どうせ相手にしてもらえない。だから、顔さえ見られれば、それでいいと思つてた。それなのに、カオルはまた会うと言つてくれた。

真也
白石

明日菜
白石

それは、あなたが勇気を出して、会いに来たからですよ。
そうじゃない。おまえが俺のために、駆けずり回ってくれたからだ。真也、ありがとう。

ハリーさん、ロサンジェルス行き、搭乗手続開始だつて。
じゃ、そろそろ行くか。真也、トランクを頼む。

白石・カオル・輝子・岩沼・名取・明日菜・孝枝が歩き出す。真也が目を閉じる。七人が立ち止まる。

孝枝

明日菜

名取

岩沼

(振り返つて) いいえ、殉職したんです。十三年前に。

(振り返つて) ハリーさん、本当のことを言つて。

(振り返つて) 「名取譲があなたを応援してます」つて。

(振り返つて) 見送りの人数は多ければ多いほどいい。

輝子
カオル
（振り返って）あなたの映画が見られる日を楽しみにしてる。
（振り返って）会うよ。こんな顔でよかったら、いつでも見せてあげる。

カオルが真也に歩み寄る。

カオル
真也
古川さん、また記憶を見てるんですか？
ああ。このトランクには、ハリーの記憶がいっぱいいてた。でも、僕が

カオル

一番見たかったものはなかった。
一番見たかったものって？

真也
ハリーだよ。でも、それは当然なんだ。ハリーの記憶の中に、ハリーはい

白石
真也
（振り返って）真也、何をしている。おまえは俺を見送らないつもりか？
今、行きます。カオルちゃん、行こう。

カオルがうなづく。真也がカオルの手を握り、歩き出す。